

ソウルグッで使用される巫具の儀礼的機能および象徴性の考察

辛多恵(中央大学校)

1. 序論

巫俗は韓国固有の土着宗教として我々の文化の中に深く根付いている民間信仰である。巫俗という宗教の司祭は‘巫女(巫堂)’と称される。巫女は様々な‘巫具’を使用し儀礼を行い、信者の未来を予言、占いも行う。‘巫具’とは巫俗儀礼で使用される1つの道具として儀礼を行うのに欠かせない道具であり、巫俗という宗教の象徴性を表現する物である。¹ソウルグッとはソウル地域で行われる巫俗儀礼を意味する。仁川や京畿地域のグッ(=祈祷)もソウルグッと類似する点があり京畿道南部の世襲巫の伝承地域を除外しソウルグッであるとみなされる。²ソウルグッは主に降神巫のための儀礼が行われ、世襲巫の地域と比較すると巫女が持つ巫具が飛び抜けて多いが黄海道や平安道と比べると種類がさほど多様ではない。³巫具には儀礼に使用される全ての道具で種類は刀剣類、扇、鈴を始め紙花、巫神図、神鏡、鎮魂の布、五方神将旗、巫女装束など多様な種類がある。本稿ではソウルグッで使用される巫具の中で一般的に多く使用される巫具である槍剣類、扇、鈴の3つの巫具を中心に論述する。

その中でも扇や鈴は“扇、鈴もない巫女がいるのか?”という言葉があるように巫女には欠かせない霊物である。⁴巫女の象徴とされる上記の巫具が儀礼でどのような機能や象徴性を持っているのかを考察してみようと思う。また、このような巫具が巫女の儀礼に流入した過程を詳しく見て、産業化という社会的事情による流入の視点から巫俗の宗教的な象徴性が弱まったことについて研究しようと思う。本稿では関連研究論文とともに筆者が京畿道の華城のとあるお堂で献酒巫祭を行って巫女キム氏とジャン氏の口述に基づきソウルグッの巫具について考察してみることにする。

2. ソウルグッの巫具

2.1 ソウルグッの巫具の種類

槍剣類の巫具は槍と剣に分けられる。槍は‘三叉槍’の一種で、剣には大神刀、軍雄刀、將軍刀、神将刀、月刀などの様々な種類がある。槍剣類の使用するのは神の身体としてお堂に祀られた時、邪鬼などを退ける時、神の靈驗を示そうとする時、危機に陥った時、神に飲食をお供えする時などだ。⁵

三叉槍は降神巫たちが使用する巫具の中で最も幅広く使用される巫具で月刀(偃月刀)や青龍刀とともに使用される。グッでは軍雄、大監、將軍などのパートで將軍神、軍雄神、大監神などを呼ぶ際に

¹ チェ・ジナ「巫具研究の成果と展望」、『韓国巫俗学』、N0. 10、2005

² チェ・ジナ「ソウルグッの巫具の研究」、『韓国巫俗学』、N0. 12、2006

³ チェ・ジナ、上記の論文

⁴ 霊物とは神聖で信仰的な神の物で靈驗あらたかな物である。これを鬼明、鬼物、神物という。ヤン・ジョンソン、『シャーマン霊物』、錦城堂・シャーマニズム博物館、2019、p. 228.

⁵ ヤン・ジョンソン、『シャーマン霊物』、錦城堂・シャーマニズム博物館、2019、p. 230.

三叉槍を振り回し踊り神を喜ばせ、その威厳を示す。⁶また、三叉槍は巫女がグッを行いながら神に食べ物をお供えするために神に捧げた供物に突き立てる大変重要なシーンで使用される。覲(男性巫女、博数)のキム氏は‘供物の突き立て’についてこう述べた。

“三叉槍を供物に突き立てる際、供物が残らなければ、神が供物をしっかり受け取られ、憑依し気持ちよく真心が伝わったということ、反対に突き立てられない場合はもう一度真心を込め突き立てにチャレンジする。この過程は供物を突いた槍が米でいっぱいの上の器の上に正しく立った姿勢で維持できるまで続けられる。神がしっかりと憑依されたかどうかを判断する重要な基準の1つだ。”

剣は上記で言及したように多様な種類があり、ソウルグッの巫女が幅広く使用する剣類には月刀や大神刀などがあり、その他の剣類は巫女がお迎えする神によって変わる。⁷本稿では巫女が一般的に扱う剣類である‘大神刀’のみを扱おうと思う。大神刀はソウルや済州地域では神刀、嶺南地域では憑依刀、黄海道地域では大神刀と呼ばれている。使用の用途によって不浄刀と分けられ、筆者が参加した献酒巫祭では仏師パートで神たちをお迎えし、憑依させる前に穢れを追い払う用途として使用し、‘不浄刀’とともに呼ばれる。大神刀は長く薄い形で、柄の部分が捻れている。これは穢れた物をその中に巻き込むという意味がある。刀尻に布または韓紙を挟んでおく。これは風を起こし穢れた気運を追い払い、良い気運を呼び込むためである。⁸これを‘大神バブ’といい、その数は必ず奇数で行われる。⁹

巫女の代表的な巫具である‘鈴’は神と交信するため使用される巫具である。神をお迎えしようとする際、再び神を送ろうとする際は鈴を振り神との交信を試みる。鈴の種類には‘七星鈴’、‘十二大神鈴’、‘九十九鈴’などがある。七星鈴は‘チルセ鈴’、‘チュイルセ鈴’とも呼ばれ、Y字の棒の端にそれぞれ3、4つの鈴が付けられている。巫女のキム氏は“七星鈴をよく見ると鈴に‘寿’という字と‘福’という字が刻印されている。グッを進め七星鈴を振るのはここに集まった信者たちに福を分け与えるという意味がある。”という説明をした。

七星鈴とともに多く使われる鈴は十二大神鈴で、十字の棒に各3つずつの鈴が付けられている。七星鈴は七星パートで七星神をお迎えする用途で使用されるものだったが、現在は十二大神鈴とともに混用され全パートで使用されている。

扇には‘五十歳扇’という異称で呼ばれているものがある。これは扇の中骨の数が50本あるからである。現在では中骨の数がめっきり減り20本、30本程度で作られる。巫女扇を50本の中骨で作られるのは神霊のために使われる物なので‘最高の扇’でなければならないと信じられて来たからである。つまり、五十歳扇は最も大きい物で、これは最上の物を意味し、そして神霊の高い威厳と最高の地位を暗示するという意味を含んでいる。¹⁰扇はその模様により畳扇、太極扇、円形扇に分類することができ畳扇はその言葉の通り折りたたんで使用する扇である。太極扇は円みのある扇。円形扇は2つの合わさった形に円みがあり、折りたたんで使う扇だ。グッで最も多く使われる扇の種類には三仏帝釈扇、七星扇、万神扇があり、迎えようとする神によって変わる。幼子・男児を迎える時には幼子・男児の扇を使用し、仙女を迎える時には仙女扇が使用される。扇を使用するのは‘風を起こし福を分けて与える’という意味を持っておりグッを進める時、巫女は信者に扇で風を起こし福を与えるふりをする。この過程で信者は扇の上に準備したお布施を置き金運が自分にやってくることを願う。またグッ

⁶ ヤン・ジョンスン『シャーマン霊物』、錦城堂・シャーマニズム博物館、2019、p. 231.

⁷ チェ・ジナ「ソウルグッの巫具の研究」、『韓国巫俗学』、2006、NO. 12、P167

⁸ ヤン・ジョンスン『シャーマン霊物』、錦城堂・シャーマニズム博物館、2019、p. 230.

⁹ イ・ミョンスク「ソウル地域の巫具の進化・儀礼的機能の研究 - 扇・鈴・大神刀を中心に - 」、『韓国巫俗学』、NO. 8、2004、P92

¹⁰ ヤン・ジョンスン『シャーマン霊物』、錦城堂・シャーマニズム博物館、2019、p. 237.

を進める最中に巫女が信者に接触する場面が生じた時は素手ではなく扇を利用し接触する。これは扇が神霊として認識されており、巫女ではなく神霊が信者と接触したという意味となる。

2.2 巫女としての入門道具、扇と鈴

神の弟子としての巫女を象徴する代表的な巫具は扇と鈴である。この扇と鈴は巫女が巫俗への道を歩むこと、巫女になる動機にもなったという。筆者が参加したグッの巫女であるジャン氏は巫女になった動機として夢の中でこんな経験をしたそうだ。。

“私が幼い頃、田舎の聞慶で暮らしていたんだけどね。そこがどうも水たまりのように見えたんです。私は必ずと言っていいほど夢で水中を歩く夢とか水の上を歩く夢を見たんです。その日も夢で幼い頃暮らした聞慶の田舎の村や貯水池が出てきたんですよ。私がちょうどそこを歩いていたら急にその貯水池が土で埋まったんですよ。正に誰かが道術を操っているかのように。そしてその上に家が1軒建ったんです。それで私はその家に入って真ん中に座っていたら空が開いたんです。その空から扇や鈴や衣装や木魚が降ってきました。ああ、これが正しい道なのだなと想いました。それで私が正しい道を歩むべく巫女になったというわけですよ。そういう意味で浄福を与えているのです。”

3. 巫具の流入過程

巫女になるために巫女は過程を履行するのに必要な巫具を準備した。過去には‘施し’と言われ、霊験を実践するため村の家ごとに歩き回り易を立て、鉄や穀物を得ていた。施された物で巫具を制作したのだ。これを‘施し’という。¹¹施しはその内容により金運と食福などの多様な意味があるので、施しを受けた巫女はその内容の意味に合った福を信者に授けなければならない。神の力を出し尽くしもうこれ以上巫女を続けられなくなったり、亡くなったりした場合は使用していた巫具を土に埋める。それを今ちょうど神の力を授かり、巫女になろうとする者が探し出し使用したりもした。これを‘鬼業にかかった’という。¹²他には信者たちから寄贈を受けたり、神の母からの贈り物を受け取ることもあった。また紙花のような使い捨ての巫具は手作りされた。最近では巫具を専門的に制作販売する企業を通じ必要な巫具を注文制作、購入して使用することも多くなった。このように企業を通じ購入した巫具は直ちに使用されず一定の儀礼を行った後に使用される。巫女キム氏の言葉によれば次のような過程を通じ巫具の神聖さを帯びさせている。

“主に購入したり、神の母から贈られたのは扇と鈴、そして巫女装束でしたね。購入はいつでもするわけではないんですよ。決まって神をお招きし、献酒巫祭を行う前に巫具を購入するんです。購入した後、巫具にお香を吸わせ、注連縄を張って一種の浄化を行います。そうした後、献酒巫祭の当日になって初めて自分の神霊を授かる時に使用するんですよ。その前までは巫具は使用できないんです。巫具は、神の母の巫具と一緒に神をお迎えし、自分がこの巫具を使用することを神霊様たちにお知らせします。装束の場合も同じで神の母の衣装をまず内側に着て、自分の装束をその外側に着てパートを進めるんですよ。献酒巫祭では神霊様たちに挨拶し、感謝を申し上げる重要なグッなので使用する花などや食べ物も全て新しく綺麗なものを準備しましたね。”

4. 巫俗の商業化による宗教的象徴性の弱化

‘施し’または‘鬼業’という一定の信仰的行為を通じ巫具を準備した過程とは異なり、現在は企

¹¹ ヤン・ジョンスン『シャーマン霊物』、錦城堂・シャーマニズム博物館、2019、p. 228.

¹² ヤン・ジョンスン『シャーマン霊物』、錦城堂・シャーマニズム博物館、2019、p. 228.

業から巫具を購入する人が多い。もちろん過去にも企業から巫具を購入することが全くなかったわけではない。施しで得たお金で注文制作を依頼、制作依頼を受けた商人は厄を払った後、制作を始めた。厄を払わない場合、依頼者が簡単な儀式を行い、制作過程を見守るなどして間接的に携わっていた。¹³このように巫具の制作過程に一定の信仰行為を行い、宗教的な象徴性を強めることで巫具に神聖さを自然に帯びさせていたのだ。しかし、産業化や政府の政策変化など様々な社会的事情などの影響により巫女社会の伝承体系が弱まっており、これにより独自に巫具を制作し、使用する自給自足型の巫女は段々と減り、業者で大量生産された巫具を購入し、使用されることが増えた。¹⁴企業の活性化はつまり巫俗の産業化を意味する。これは巫具を制作する過程で帯びる宗教的な象徴性が弱められたと言える。¹⁵しかし、上記の巫女キム氏のように購入した巫具に一定の儀式を行うことで神聖さを帯びさせた後、巫具を使用したり、昔と変わらず巫女が手作りしている巫具も存在していることを勘案すると、使用される巫具の神聖さを残すための努力、努力されている点を看過してはいけない。

5. 結論

ソウルグッの降神巫たちが活動する地域で、最も活用される巫具は槍剣類と扇、鈴である。本稿では上記の巫具の機能と儀礼の象徴性について論じてきた。そして筆者が実際に参加した京畿道華城のお堂で献酒巫祭を行っている巫女キム氏とジャン氏の口述を基に記述してきた。巫具が過去に施しや鬼業のような信仰的な行為を経て巫俗に流入したのとは異なり、今日では様々な業者や工業製品の大量生産の影響で制作過程で信仰的な行為が消え、巫俗の宗教的な象徴性が弱まった現状を考察した。巫女キム氏の口述のように購入した巫具に神聖さを帯びさせるための制作過程で、巫具が持つ神聖さを残すために行われる一連の過程についてさらなる研究が必要だと思われる。

参考文献

- ヤン・ソンジュン(2019)「シャーマン霊物」、錦城堂・シャーマニズム博物館
イ・ミョンスク(2004)「ソウル地域の巫具の進化・儀礼的機能の研究 - 扇・鈴・刀を中心に -」、『韓国巫俗学』、NO. 8
チェ・ジナ(2005)「巫具研究の成果と展望」、『韓国巫俗学』、NO. 10
チェ・ジナ(2014)「巫俗の伝承体制の弱体化が巫具制作に及ぼす影響」、『韓国巫俗学』、NO. 29
チェ・ジナ(2006)「ソウルグッの巫具の研究」、『韓国巫俗学』、NO. 12

(翻訳責任者：澤井亮佑)

¹³ チェ・ジナ「巫俗の伝承体制の弱体化が巫具制作に及ぼす影響」、『韓国巫俗学』、NO. 29、2014

¹⁴ 上記の論文

¹⁵ ヤン・ジョンスン『シャーマン霊物』、錦城堂・シャーマニズム博物館、2019、p. 229.